市長賞

待雪草

君野もん

僕はその時、主任看護師から渡されたメモで、唐突にその人の死を知らされた。その人が長くないことは分かっていた。

声も出せずに喉がぐっと締まり呼吸が苦しくなる。この時が来ることを知っていたのに、絶対に泣いてはいけないと思っていたのに、声も上げられず涙がボタボタと流れては落ちてマスクの中が涙と汗で蒸れていく。

そばで誰かが声をかけてくれているのは分かっているのに何も耳に入ってこない。僕はその場にうずくまった。

しばらくして我に返った。そばで主任看護師が僕の背中をさすっていた。僕の防護服の中は不甲斐ないほどに涙で濡れていた。大人になってこれほど泣いたことなどあっただろうか。まして男なら泣くなんてことはない方がいいと思って生きてきた。それでも涙は勝手に溢れた。人間は本当に悲しいときは感情なんてすっ飛ばして体が反応するのだとこの時知った。涙を止めないといけないと思えば思うほど体は言うことを聞かない。主任がずっと背中をさすってくれている。そして、休憩に行くよう促された。僕は防護服をやっとの思いで脱

ぐと涙はやっと止まってくれたが休憩室の椅子から動けなくなった。頭の中はその人と交わした言葉がぐるぐると駆け巡っている。制御できない自分を今ほど恨めしいと思うことはなかった。いつだって冷静に働くことを信条としてきたのに今自分の中になにもないように思うほど苦しい。

僕は看護大学を卒業して今年五年目の看護師だ。看護婦という名称が看護師という名称に代わってからこの職種には男性看護師が増えた。看護大学ともなれば男子学生も珍しくはないが、実際に現場に出るとやはり病院は医師を除けば女性が大半を占める。大学の同期の男性看護師たちも東京の大きな病院で働く者や僕のように地元に戻って働く者などにそれぞれ分かれ、あれだけ男性看護師は結構いるもんだと思っていたことが心細く思うほどだ。それでもここ数年は、僕が働く総合病院のような大きな院の各病棟に男性看護師が二、三人は配置されるようになった。先輩でも男性看護師は少ないが配置されている。女性の多い職場という現実は払拭されない中で男の僕がどう働くのかは、大学の実習時代からよく考えていた。現場で男性看護師に求められていることはなにか。そして僕自身が求められていることは何かを今でも繰り返して行動の根っこに持っているようにしている。とりわけ、僕の働く整形外科の病棟では外傷の患者さんや手術を受ける患者さんが多いため男手は他の病棟よりも重宝されている。それにこの病院では各病棟への男性看護師の配置は差別がない。看護師の一人として働けることがありがたい職場だ。また、病院によって大きく違うだろうがこの病棟の患者さんのほとんどは中年から老齢の人ばかりだ。たまに部活中に骨折をしたという少年も見かけるが、ほとんどの人たちは生活の中で転んだりつまずいたりして怪我を負った人たちや体の自由が利かなくなって手術を受ける人達ばかりだ。

そしてその人に出逢ったのは、今年入った後輩看護師を僕が教育係として見ることになった時だった。その日左足の複雑骨折の手術を受けるために入院してきたその人は加須賀弥生さんといった。入院するとすぐに僕らは患者さんに既往症や服薬の確認などをするために病室までいって話を聞き電子カルテに入力していく。加

須賀さんの担当は僕が受け持つことになってはいるが主には研修中の坂下が担当することになった。この作業は決まっていることを聞き取ったり、血圧を測ったりするのだけれど坂下は初めてということもあってマニュアル通りに始めた。

加須賀さんは年の頃は七十歳前後だろうか。小さなかわいらしいおばあちゃんと言った感じでニコニコとこちらを見ている。複雑骨折をしているほとんどの人はもう少し痛がったり険しい表情をしたりしているものだけれど、加須賀さんはどこも悪いところはないのではないかと思うほど笑顔でこちらを見ている。

パソコンの電子カルテを見て坂下が過去の病歴について加須賀さんに聞き始めた。

「おばあちゃん。こんにちは。担当の坂下です。これから少しお話を伺いますね。過去にうつ病のお薬を飲まれていましたよね」

パソコンを覗きながら坂下がそう尋ねると、加須賀さんは笑顔のままだがしばらく沈黙した。僕にはそれがとても長い沈黙に思えて、聞こえてないのだろうか、もしかしたら耳が聞こえにくいのかもしれない。サポートに入ろうかと思った時に、加須賀さんが口を開いた。

「お嬢さん。ここは大部屋ですよね？　私ね、自分の病気のことあまり誇りに思えないの。その薬を飲んでいたのは随分と前ですしね。できれば大きな声で読み上げるのは今度二人きりの時の秘密にしていただくことはできないかしら？　まるで子供のようにおばあちゃんと呼ばれるのも好きじゃないの。屁理屈かしら？　あなたが一生懸命なのはとてもわかるのだけれど、この歳まで生きてきたくせにまだ見栄が邪魔するの。ごめんなさいね」

と今までの笑みは消えてまっすぐに坂下を見ながらそう言った。坂下はどうしたらいいのかわからず、僕の顔を一度見て下を向いた。僕は正直この時、ああ、面倒くさい患者さんに当たってしまったなと感じた。

「代わるよ」

と坂下に伝えて僕が加須賀さんに少し近づき小さな声で

「加須賀さん。嫌な思いをされたなら本当にすみません。でも僕らも加須賀さんが入院中にどんなことにも対応できるように伺っておきたいんです。これまでの病気のことって個人情報ですよね。配慮が足りなくてすみませんでした。坂下はこの病院で直接患者さんとお話しするのが今日初めてで少し頑張りすぎてしまいました。退院される日まで僕と坂下でお世話させていただけませんか」

と伝えた。

すると加須賀さんは再びニコニコと笑顔で

「私にはね、看護師さんの服を着た人はみいんな同じに見えるの。そう思わない？　前澤さん」

僕はぐうの音も出なかった。確かにそうなのだ。患者さんから見える景色でナース服を着ている人はどの人も同じで、どの人が熟練でどの人が新人なんてことは分からない。でも最初に僕らが名乗った時に新人研修を兼ねていることは伝えていた。それなのにこんな返答をしてくるなんて意地の悪い人だなと僕は感じた。そして、ますます面倒な患者さんに当たったなと思った。少し意地の悪い反応だったのにこの後の加須賀さんは採血には

「血管が細くて申し訳ないわ」

と笑顔で応じてくれた。

患者さんは病院という場所に来るとその人の本質的なものが現れると僕は数年前から感じていた。例えば女性看護師をお姉ちゃんと呼ぶ老齢の男性や子供のように駄々をこねるおばさん、看護師に売店の買い物まで頼もうとする患者さんなどとにかく病気やけがで気持ちが弱くなっている人は看護師に対して甘えが出るのはよくあることで、先輩の看護師からもそういう患者さんとはうまく付き合う術を身に付けるようにと今でもよく言われる。後輩の坂下からしたら、今日のこれはその洗礼を受けたに過ぎない。それでも落ち込んだのだろう。スタッフステーションに戻ってきた途端に泣き出した。正直、これは新人看護師がみな通る道だ。患者さんとはわがままを言ったり無理難題を言ったりする存在なのだから。そうした行動も裏側には病気になった自分へ

の不甲斐なさや手術に対する不安からだということも少なくない。そうしたことを全てひっくるめて退院するまでの間のお世話をするのが僕らの仕事なのだと坂下には言い含めた。周りにいる仲間たちもよくあることだよと通りすがりに坂下に声をかけてくれたり、僕に大変だったねと言うように目配せしてくれたりしたが僕は久々に不安を感じ始めていた。

加須賀さんという人が少し注意を払わなければならない患者さんだということは分かったものの、僕には少し気になることがあった。それは坂下のことを「お嬢さん」と呼んだにもかかわらず、僕のことを「前澤さん」と名前で呼んだのだ。女性看護師が嫌いなのだろうか。それとあの笑顔だ。この違和感は僕の思い過ごしだろうか。僕はとにかく加須賀さんのカルテをよく読んで翌日からこの人を気に留めようと決めた。

病棟の看護師の仕事は、外来や手術室の看護師とは少し異なって、病気に対するアプローチに直接かかわる以外にも、入院中の生活を助けていくという仕事がある。体が不自由な人にはトイレに付き添ったり、入浴できない人の身体を拭いたり、指示があればリハビリの手伝いもする。とにかくそれを個人オーダーのように作業をこなしていかなければならない。仕事を残してしまえば後の時間に勤務する仲間たちにしわ寄せが行く。何より患者さんたちに必要なことをしなければ、一番不快な思いをするのは患者さんたちだ。

翌日、朝のミーティングを終えて各病室を回るラウンドに向かう。血圧を測り採血をし、服薬の確認や手術やリハビリの必要な人にはその日の予定を伝えたりすることで患者さんの様子を電子カルテに残し、医師の治療に役立てるのだ。加須賀さんの病室に近づくにつれ坂下の顔が緊張でこわばっていくのがわかった。この病室は四人部屋で、加須賀さんの他に腰の骨を折って手術を受けた前田さん、指の関節の2回目の手術を受けた友野さん、転んで大腿骨を骨折した土屋さんがいる。友野さんは簡単な手術ということもあって数日で退院する予定だ。しかし、残りの3人は正直曲者ぞろいだと僕は腹を括っていた。前田さんと土屋さんは軽い認知症を患っているのだ。伝えたことがうまく伝わらないことも多い。薬の飲み忘れにも注意しなければならない。でも、それ以上に加須賀さんとどう接していくか気が重かった。坂下は昨日ひとしきり泣いて切り替えができ

たのか、加須賀さんに笑顔で
「おはようございます。加須賀さん。足はどうですか」
と他の患者さんに接するようにできていた。加須賀さんも昨日のやり取りがなかったように笑顔で
「今は手術のことが一番心配」
と答えた。僕は拍子抜けした感はあったがほっと安堵した。ラウンドを済ませると、清拭といって患者さんの身体を拭く日課に取り掛かる。入浴の許可が下りる迄は火曜日と金曜日は身体を拭く日になっている。ところが、この清拭が男の看護師にとってはいつも心が穏やかではいられない一瞬だった。それは、女性の患者さんの十人に四人は身体を拭かせてくれないからだ。
「女の看護師さんではダメかしら」
と言うのだ。それは、認知症のおばあさんであっても男の看護師に身体を拭いてもらうのは嫌だと言うのだ。
この時、本当に僕は空しくなる。
「僕じゃダメ？　僕も看護師ですよ？」
と言ってもダメな人は強固に断る。看護師の仕事を男とか女とかでできないなんてことは僕は悔しくて仕方がない。それでも僕が我を通したところで患者さんの身体がきれいになるわけでもない。この病室では友野さんはすぐに退院するのと体に不自由がないということもあり自分できますよと言ってくれ、お湯の入ったバケツとタオルを渡すだけで済んだ。認知症の前田さんと老齢の土屋さんは
「男の人が拭くの？　いやあねえ」
「恥ずかしいよ。嫌だ。嫌だ」
と言いながらも坂下が主に拭いていることもあって受け入れてくれた。しかし、加須賀さんは僕が清拭に立ち会うことを頑なに断った。またかと僕は思った。仕方なく女性の坂下に清拭を任せて僕は男性の患者さんの身体を拭きに行くか、外来へ行く患者さんを車いすに乗せるかするために一旦病室を出た。何度もこのやり取り

は経験しているけれどやっぱりいつまで経っても男性看護師という壁はなくならないなと感じる。そしてそんな風に病棟の午前中は医師の回診などもあってバタバタと過ぎていく。この病院は四交代制のため午後には僕も坂下も退勤となる。次の勤務は明々後日の夜勤だ。

夜勤の晩、坂下が僕に言った。

「先輩、加須賀さんが私のことをお嬢さんと呼ばなくなったんです」

坂下本人もお嬢さんと呼ばれていることに気が付いていたんだなと知った。

「どうして名前で呼ばれるのか理由はなんだろう」

と僕が尋ねると

「それがよくわからないんですよね。いつの間にかお嬢さんではなく、坂下さんと呼んでくれていたので」

お嬢さんと名前呼びの差はなんだろう。僕はやはりそこが不思議でならなかった。

夜勤は就寝前の服薬の確認やトイレに行けない人のおむつ交換など就寝前に各病室を回る。認知症の患者さんは夜になると大きな声を出したり徘徊したりする人もいる。症状が重い人になると、せん妄といってありもしないことを訴えることもある。加須賀さんの病室は軽い認知症の二人がいるため気にかけなくてはいけない病室の一つだった。

ところが、その晩はやけに静かな夜だった。いつもなら前田さんが

「痛い。痛い。誰かたすけてー」

などと何十分も大きな声で叫びだす。土屋さんもナースコールを押しては看護師を呼び、聞いてみれば自分がなぜここへ来たのかという顛末と娘さんの自慢話が始まるといった具合だ。同室の友野さんは数日で退院とは言うものの眠れないのはつらいとこぼすほどだった。

巡回に行くと病棟内が静かだ。その静けさがやけに怖くも感じる。病室のそばまでいくと廊下の一番奥に車

いすの加須賀さんの後ろ姿が見えた。廊下の一番奥の窓というのは全面ガラスがはめ殺しになっておりそこから街の灯りが見える。日中などは携帯電話で話す人がよくそこを利用したり、ベッドの移動のために一時物品やベッドを置くこともあるスペースだ。僕は傍までいって小さな声で

「加須賀さん。眠れないんですか」

と声を掛けた。すると

「こんばんは、前澤さん。起きていてはいけないのでしょうけど。年寄りになるとあまり眠れなくてね。若いときには一日がもっとあればと思っていたのに、何もすることがなくなってから時間が過ぎるのが長くてね」

と答えた。そして

「そういえば前澤さん。先日はごめんなさいね。こんなおばあさんなのに男性に体を拭いているところを見られたくないなんて。私ね、死ぬその日まで自分のことは自分でやり遂げたいの。くだらないプライドでしょ？坂下さんも拭いてくれると言ってくださったんだけど、どうもそういうのは苦手でね。意地っ張りなばあさんよね。でもあなたが男性の看護師だからじゃないのよ。これは私の心の問題。もし、あなたがそれで悩むようなことがあれば困るわ。だから気にしないでほしいの」

と僕が思ってもみないことを口にした。なんだかこの時、自分の心を見透かされたような気持ちになった。いつも、患者さんから男性だからという、自分ではどうにもできない立場に悶々とする一瞬があった。それをはずかしいからという理由ではなしに僕の性別が問題ではないという患者さんは初めてだった。そして、なぜか僕はこの時これまでのことも自分が悪いのではなくて不可抗力なことだったのだと腑に落ちてしまった。男だからとか女だからとこだわっていたのは患者さんではなく僕の方だったのだとわかった。僕は

「そうだったんですね。気にしていませんよ」

と返して、眠れなくてもベッドに戻りましょうと加須賀さんを病室へ戻るように促した。

翌朝、夜勤の勤務が終わるころ、加須賀さんと同室の友野さんが退院するというので、挨拶のためスタッフ

ステーションに寄ってくれた。そこで、僕はちょっとちょっと、と手招きをされ思いも掛けないことを聞くこととなった。

「ねえ。看護師さん。あの加須賀さんっていうおばあさんは何者？　介護関係の仕事でもしていたのかしら？」

「どうかしたんですか？」

「実はね、昨日も同じ部屋の二人が騒ぎ出したのよ。ああ、今夜も眠れないのかと思っていたの。そうしたら、加須賀さんがまず前田さんのところに行って『眠れないの？　そう痛いわよねぇ。私も手術したばかりだから本当に痛いわ。でもねえ知ってる？　大きな声を出すともっともっと痛くなるのよ。さあ、深呼吸して。そうそう。上手ねえ。眠るまでそばにいますからね』って多分背中をさすっていたの。それからね、前田さんが静かになっていびきが聞こえたら、土屋さんのそばにも行って『今夜は私が話を聞きますね』ってひとしきり、いつもの入院までの話と娘さんの自慢話を聞いて寝かしつけちゃったの。まるで猛獣使いよあの人。おかげで私、ぐっすり眠れたもの」

とまくしたてて退院していった。僕は昨晩の怖いまでの静けさに合点がいった。加須賀さんが更に不思議な人に思えてきた。そもそも、看護師を一人一人名前で呼んでくれる患者さんは珍しい。気に入った覚えのある看護師を名前で呼ぶことはあっても、看護師全てを名前で呼ぶということはない。その上、同室の患者さんたちを安心させ落ち着かせる人など先ずいない。僕は次の夜勤の日が早く来ないかと気持ちが急いた。

あの夜勤の日の後、同僚の看護師に加須賀さんの普段の様子について聞いてみた。するとやはり皆あの人は変わっている、ちょっとコミュニケーション能力が違うと言うような話が聞けた。ある日の昼、背中に刺青の入っている男性の患者さんと廊下で話している加須賀さんを見かけたという。作業をしながら何かあったかと様子を窺っていると、談笑しているというのだ。それを清掃のスタッフに話すとその前日に加須賀さんがその患者さんを諭すように叱っていたというのだ。どうも、その男性の患者さんが女性看護師をお姉ちゃん呼ばわ

りした挙句にお尻を触ったというのだ。それをたまたま見かけた加須賀さんがその患者さんに話しかけ、
「あなた、どんな怪我で入院されているの？　そう。大変ね。ご結婚されているの？　お子さんは？　そう、娘さんがいるの。6歳？　まだ小さいわね。かわいいでしょうね。でも、考えてちょうだい。その娘さんが将来働いて、見も知らぬ男に姉ちゃん呼ばわりされてお尻を触られたところを。腹が立たないかしら？　あなたが触ったその看護師さんにも親御さんがいて今のを見たらどれだけ腹立たしいでしょうね」
と言ったのだという。その後、その患者さんは看護師に謝って加須賀さんとも仲良く話すようになったというのだ。清掃スタッフがそれは小気味よかったと話していたということだった。僕は、加須賀さんを最初、面倒な患者さんだと感じた。でもそれはきっと加須賀さんなりの正義があったからなんだと思った。尚更、今夜の夜勤で加須賀さんと話すチャンスはないだろうかと、どうしてなのか今の僕は思っていた。
　その夜は静かという訳にはいかなかった。手術の後に麻酔が抜けきらず、せん妄状態になり大きな声を出す患者さんが時々いる。この夜もそういう患者さんがいてその人のケアやトイレに間に合わず服を汚してしまった患者さんの対応に追われていた。次の日が手術という人が3人ほどいて点滴の準備やら交換もしなければならなかった。落ち着いたのは夜明け前、廊下がうっすら明るくなり始めた頃だった。少し時間がずれ込んでしまったが各病室を回っていると、廊下の奥に車いすで白んでいく空を眺めている人がいた。加須賀さんだった。
「目が覚めてしまいましたか」
僕は声を掛けた。
「あなたに会えたらと思って待っていたの。別にこれと言って話すことはないのだけれど。あなたに会えたらと思って。会えてよかったわ」
「僕もどうしてか加須賀さんと話ができたらなと思っていました」
と伝えると、加須賀さんは
「あら。相思相愛ね」

と冗談っぽく笑った。そして、加須賀さんにどうして看護師を名前で呼ぶのか聞いてみた。加須賀さんはうーんと少し考えてから

「前にも言ったと思うけど、子どもを扱うようにおばあちゃんと呼ばれるのは好きじゃないの。だから私も極力看護師さんって一緒くたに呼ばないの。だって、私たちお互いちゃんとした大人だもの。ねぇ。そう思わない？　男だから女だから若いから年寄りだからなんてものに縛られたくないの」

僕の心のどこかに感じていたのはそう言うことだ。男だから、若いからだというそういうことじゃなくて一人の看護師としてみて欲しかったんだ。加須賀さんが言ってくれたことで僕はなんだかホッとした。少しの沈黙が流れた。沈黙の間、何故かはわからない。唐突に僕は自分のことが話したくなった。この人ならなんの脈絡もなく、そして自分の意見を押し付けてくることもなく僕の話を聞いてくれるのではないかと思ってしまった。

「あの……。もしよかったら僕の話をしてもいいですか」

「ええ。どうぞ」

「僕、辞令が出ていて数日後に他の階に行くことになっているんです」

「そう。こんな時期に異動なんて珍しいのね」

「はい。でも迷っています。というより不安なんです」

「そう。それはどうして？」

「僕がこれから行く階は、最近この市の港に客船が入港しましたよね。その客船で発生した伝染病の専門病棟なんです。患者の人数がどんどん増えていて、ワンフロアを緊急専門病棟にすることになって、各病棟から看護師が集められることになりました」

「そう。ということは、あなたは有能ということじゃないかしら。乞われていくのだもの」

僕は押し黙った。本当に僕は求められてそこに呼ばれるのだろうか。新卒から五年目、後輩の教育係にもなった。でも僕は、本当は毎日どんどん自信を失っていた。できることが増えてもそれが合っているか間違ってい

るか自問自答する日が増えていた。自分がなぜ看護師になったのかも忘れていく。
「その仕事は大変でしょうね。不安があっても当たり前よね。誰も経験したことがないような場所に行こうとしているのでしょうから」
加須賀さんは僕の目をまっすぐ見てそう言ってくれた。それでもその言葉は僕の慰めにはならなかった。僕は尚も押し黙った。
「前澤さんならきっとカルテをちゃんと見てくれているでしょうから知っていると思うけど。私ね。直に死ぬの。癌だから。足の手術も終わったし退院したらホスピスに入ることになっているの。こんな私にも最後まであきらめないっていう気持ちをくれる看護師さんてすごい仕事よね。みんな一緒に頑張りましょうねって言ってくれるの。結果どうなるかはわからないけど、人の命を生かそうとする仕事でしょ。誰にでもできる仕事じゃないわ。もっと自分を信じて。あなたの環境が変わろうとしているのは、きっと機が熟しているからよ。ただの偶然なんてものだったら未熟なままでもその時はやってくるもの。でも、そんな時はろくなことがないわ。あなたはきっとちゃんと準備ができているはず」
加須賀さんの言葉は僕が求めていたものではなかった。
「加須賀さんは僕の何を知っているんですか。僕に準備ができている？　本当にそう思いますか？　僕は迷っているんではなくてビビっているんです。もし伝染病にかかったらどうしよう。僕なんかがそんな最前線の場所で役に立つのか。僕はこれまでだって誰かの役に立てていたのかさえわからない」
僕は思わず声を荒らげた。加須賀さんに今の怒りにも似た感情をぶつけてみたところで何の意味がないことは自分がよくわかっている。それもこんなこと患者さんに話すことじゃない。患者さんとは一線を引く、そうやってきたのに自分のプロ意識の低さに腹が立って仕方がなかった。
「あなたは我慢強い人なのね。全部、自分の人生で起こることを自分の事として受け止めてきたのね。それだけでも強い人だと思う。私ね。死ぬ間際までどんなに痛くても笑っていようと決めたの。痛みを伴わないで得

られるものなんて生きていたらないんだと思うの。だから笑ってその痛みを受け入れたら、死ぬ瞬間、嗚呼よくやったって自分を褒めてあげられそうな気がするの。でもね……これからを生きていく人はそんな我慢しなくていいのよ。痛いと思ったら痛いと言っていいと思うの。患者さんがそうでしょ？　人間むき出しで痛いと言うもの。それを看護師のあなたがしてはいけないなんて誰も責めたりはしないわ。こんなおばあさんにでも痛いと言ってくれてありがとう」

そう言って加須賀さんは僕の顔を覗き込んだ。

「すみません。失礼します」

紅潮した自分の顔を見られたくなかった。僕はその場所から逃げ出した。視界の端に困った顔をした加須賀さんが見えたがそのまま立ち去った。僕は何を加須賀さんに求めていたのだろう。行かなくていいよと言って欲しかったのだろうか。しかし行かなくていいと言われたとしてもきっと僕の中に行かないという選択肢はなかったと思う。自分のモヤモヤした気持ちを誰かにぶつけたかっただけだったのか。なにも言えずに立ち去ってしまった自分の失礼さにも腹が立った。

数日して僕は緊急専門病棟にいた。他県でも同様の伝染病が発生していて、最前線は戦場だと例えられるがまさに戦場だった。本来病棟の看護というのは個々人の力ではなくてチーム力が求められる現場なのに、ここは各病棟から集められたスタッフで構成されている。どの人も僕は初めて一緒に働く人たちで息のあった連携プレーなど望めるものではなかった。緊急と名のつく病棟だけにオリエンテーションもなく急変していく患者さんに対応しなければならなかった。覚悟をしてここに来たという熟練看護師でさえも日に日に疲弊していくのがわかる。急ごしらえの現場で物品がどこにあるのか命令系統がどこにあるのかも迷うことが多々あった。休憩でさえもいつだれがどの順番で行くのかさえも分からない。自然と長時間の勤務になる。ましてや防護服を着なければならない。防護服を着るだけでも相当な時間が取られる。簡単に脱ぐこともできないとなると簡

単に休憩など取ってはいられないのだ。また、それぞれがいた科によって準備一つも手順が違う。その擦り合わせも現場の中で行うしかなかった。

患者さんが急激に悪化する病状に安心感を与えなければならない看護師の自分が、いつも不安で仕方がなかった。防護服やマスクを着用しているおかげで患者さんに表情を読み取られないだけマシだった。毎日があっという間に過ぎていく。あの日の加須賀さんのことを思い出す余裕さえもなかった。やっと防護服を脱いでアパートに着いてもシャワーを浴び宅配の弁当を掻っ込むと眠気に襲われてベッドで寝ることもできなかった。

感染者が増えて、いつこの状況が終わるのかわからない日々が続いていると、看護師の中には体調を崩すものも出てきた。毎日、治療や看護する側から感染者を出してはいけないという張り詰めた空気や慣れない看護師同士のコミュニケーションだけでも神経がすり減っていく。時折家族からアパートまで行こうかと心配してくれて連絡が入るけれど、それも全て断っていた。どこから感染が広がるかわからない。もしかしたらもうすでに自分が保菌しているかもしれないという恐怖とも戦わなければならなかった。孤独だった。

この状況が長期化することが政府の発表や有識者、研究者の発表からもわかったある日、休憩室の机の上に段ボールが置かれていた。段ボールの縁に「差し入れ　各病棟より」と書かれている。緊急専門病棟の全員に宛てた物や個人の名前が書かれているものもある。僕宛に差し入れがあるなどとは思っていなかった。そうしたことに心を動かされる余裕さえもなかったのだ。しかし、目に入ってきたのは僕が好きなチョコレートスナックにセロハンテープでぐるぐる巻きにされデカデカと「前澤センパイへ」と書かれた茶封筒だった。後輩の坂下の字だった。休憩室の椅子にドカッと座りぐるぐる巻きのセロハンテープを「もう何やってんだよ」と言いながら剥がした。封筒の中には坂下から

「センパイへ

私みたいな未熟者が頑張ってなどという言葉は送ることができません。でも、応援しています」

丸い文字で書かれていた。そして

「P．S．　一緒に入っている封筒は加須賀さんが退院されるときにセンパイに渡してほしいと頼まれたものです」

この時、やっとあの晩のことを思い出した。背中が冷たくなる。思い出したくなかった。思い出せないほど目まぐるしい毎日がいきなり止まったようにさえ感じた。迷った。この封筒を今開けて、もう一度最前線に戻れるのか迷った。それでもふと思い出したのは、加須賀さんの先行きが長くないということだった。意を決して封筒を開けた。そこには

「前澤さんへ

あの晩、あなたにうまく伝えられなかった事を後悔しています。なんと伝えたらあなたの助けになれたでしょう。私にもう少し誰かの心に寄り添える力があったのならと思っています。その上で、私にできることは何かと考えました。同封したのは私が自分の庭で育てた待雪草の押し花です。お守りくらいにはなるかしら？　もし、心が弱ることがあったら眺めてください。入院中は本当にありがとうございました。あなたが私をか弱いおばあさんではなく一人の人としてきちんと名前で呼んでくださったこと、私の気持ちを聞いて心を安らかにしてくださったこと忘れません。どうかご自愛ください。

加須賀　弥生」

と書かれた手紙と透明のコーティングがされた白い小さな花の押し花が入っていた。僕は涙が出そうになるのをぐっと堪えた。そしてさっきまで孤独だと感じていた胸のあたりが温かくなるのを感じた。あの日の加須賀さんへの失礼な自分に恥ずかしさを感じながら加須賀さんのくれた白い花の押し花を手帳に挟んで胸ポケットに入れた。そして一緒に入っていたチョコレート菓子を口いっぱいに頬張って一袋を平らげると仕事に戻った。

僕の担当している患者さんは人工呼吸器をつけていてかなりの重症だった。薬を投与しても何日も熱が下がらない。点滴もだんだんと使える血管が見つからなくなってくる。人工呼吸器をつけているため話すこともできない。

そして、急激に悪化した。心臓マッサージをする。担当医が機械をつけて心肺蘇生を試みる。それでも繋ぎ止められない。心の中で生きろ！　生きろ！　と何度も念じる。それも届かない時がある。整形外科の病棟では突然に患者さんが亡くなるなんてことは先ずない。でもここでは、むしろ死に直面させられている。亡くならなかったとしてもギリギリのところまでいく患者さんもいる。そうして死に直面していくと生を感じる最も近い場所のように思えてくる。でも、一方で、そうして患者さんの死を目の前にする度に看護師自身の中にある使命感とか熱意とかそうした脆いものでこの人たちの生死が成り立っていると思うとゾッとしてくる。政府は医療の現場は破綻していないという。病院も破綻させないことを装っている。不信感は募る。だって、現場を成り立たせているのは医師や看護師、それを取り巻くスタッフの使命感だけに支えられているのだから。なんて脆いものの上にいるのだろう。心底僕はそう思った。そして、僕は誰かを救えないと空しくなった。それでも目の前には救わなければいけない命が運ばれてくる。

そんな時に、加須賀さんの死を知らされた。

僕は休憩室を出ると、先ほど主任看護師から渡されたメモに書かれた加須賀さんの姪御さんへ電話をいれた。

「はい。滝野です」

「すみません。私、前澤と申します。病院に伝言をいただいた前澤です」

姪御さんに驚く様子はなかった。

「お電話くださってよかった。叔母から最後のお願いを頼まれていたものですから。あなたのことは何度も聞いていたのですが、どうやってコンタクトを取ればいいのかわからなくて。入院した時の若い看護師さんと会えたのでお願いしました」

「そうですか。お知らせいただいてありがとうございました。あの……、加須賀さんの最期について伺ってもいいでしょうか」

僕は加須賀さんの最期を知りたかった。滝野さんは静かに話し始めた。
「叔母は最後まで痛かったでしょうし、苦しかったと思うんですよ。でも笑おうとするんです。ひきつった笑顔が余計に痛々しくて。あの日も起き上がれないのに、歯磨きは自分ですると言い張ったりしてね。わがままなのかあの人らしいのか……」
最後の方は嗚咽に変わっていた。しばらくの沈黙のあと
「叔母はよく人に自分の育てた花の押し花を贈っていたんです。むしろ贈るために育てていたという方が正しいかもしれません。特にスノードロップの押し花は若い人によく渡していました。私も十代の頃もらいました」
「もしかして白い花ですか？　ええ。僕も白い花の押し花をお守りだと受け取りました」
電話を掛けながら、僕は胸ポケットからそれを取り出した。
「多分、それは待雪草です。待雪草、スノードロップという花です。スノードロップの花言葉は知っていますか」
「いいえ」
「そうですか。それが多分あなたへの叔母の遺言のような気がします」
「わかりました」
僕は不思議な気持ちになった。そして滝野さんにお礼を言って、こんな状況なので葬儀に参列できないことを伝え電話を切った。すぐさま、スノードロップの花言葉をネットで調べる。そこには
「希望
逆境の中の希望
慰め
もしもの時の友
死」

と書かれていた。加須賀さんは人生に希望があると伝えたかったのだろうか。それとも僕を希望だと思ってくれたのだろうか。人生の中でほんの一瞬すれ違った程度の僕を、最後まで覚えていてくれたことを僕は忘れてはいけないと思った。人を救うことや人のために何かをすることが、最終的に僕の脆弱な熱意や使命感みたいなもので支えられていたとしても、僕はこの先もこの仕事していくんだろうなとこの時思った。いや、もしかしたら僕は誰かの役に立ちたいという「誰か」を主体にして僕がどうしたいのかということを忘れているのかもしれない。誰かのために生きることは貴いかもしれないけれどそれだけじゃなくて、自分の人生を変えるのは自分がどう選択するかだ。加須賀さんのように死ぬ間際まで笑っているという選択を僕ができるかどうかだ。誰かを生かす現場が誰かの使命感によって支えられているのだとしたら、僕は自分自身がそれを選ぶという強い気持ちがなければ誰の役にも立たない。加須賀さんが言いたかったことはそう言うことなのだろうか。僕はこの先何度もこの小さな白い花を眺めて自分の中に何があるのかを確認していく。

生きていく中で、時に自分の考え方やこれまでやってきたことを覆してしまう人に出逢うことがある。それは前触れもなくやってくる。加須賀弥生さんとの出会いはそうした出逢いだったと信じている。

僕はもう一度、待雪草の押し花をそっと手帳に挟んで胸ポケットに入れると再び防護服を着た。